

平成26年度文学研究科共同研究 研究成果報告書

申請者氏名	橋本順光
-------	------

研究課題名	近代日本における対外観とその環流をめぐる総合的研究
-------	---------------------------

研究組織

氏名	所属機関・部局・職名	専門分野
橋本順光	文学研究科・准教授	日英比較文学
合山林太郎	コミュニケーションデザインセンター/ (兼任) 文学研究科・准教授	日本漢文学 日本近世文学
岩井茂樹	日本語日本文化教育センター・准教授	日本文化史 比較文化学
ルチャーナ・カルディ (Luciana Cardì)	言語文化研究科・特任講師 (常勤)	日本近現代文学・比較文学
平松秀樹	外国語学部・非常勤講師 文学研究科・元非常勤講師	タイ文学 比較文学
鈴木暁世	金沢大学・人間社会環境研究科・准教授 文学研究科・非常勤講師	日本近代文学 比較文学
莊千慧 (Chuang ChienHui)	文学研究科・外国人招聘研究員	日中比較文学・比較文化
河村民部	近畿大学・名誉教授	英文学・日英比較文学
久保田裕子	福岡教育大学・教育学部・教授	日本近現代文学・比較文学
ナムティップ・メータセート (Namthip Methasate)	タイ国・チュラーロンコーン大学・文学部・准教授	日本近現代文学

※1行目に研究代表者（申請者）を記入してください。

※本学関係者については所属機関（「大阪大学」）は省略してください。

研究の目的・計画

申請書に記載したように、対外観の「還」流的な個別研究から、「環」流という総合的研究に向けて、日タイ交流史と日英交流史の二点から相互の研究の立体化を図る。それは近代日本と対象地域との往「還」だけではなく、他の地域や時代との複雑な交渉と転移を繰り返し循環「環」する現象として、対外観を明らかにすることにほかならない。一方的なオリエンタリズムの投影のように、対象地域のイメージが日本側の事情で決定するというだけではなく、日タイおよび日英と同時に、日英タイという三点から、相互交渉の副産物や転用を跡づけるよう努める。

日タイ交流史については、岩井氏、久保田氏、合山氏、平松氏、メータセート氏を中心に、研究の分担を行う。具体的には、8月26日にチュラーロンコーン大学の国際シンポジウムにて研究発表を行い、知見を交換・共有する。

日英を中心とする交流史については、河村氏、鈴木氏、カルディ氏、莊氏らと意見を交換し、その成果を9月26日に大阪大学での国際シンポジウムで発表し、知見を交換・共有する。

上記シンポジウムに伴い、申請書に加えて研究分担を依頼した。

上記の交流史研究については基本文献が本学にはなく、旅費を最小限度にとどめることで、予算は備品となる文献の収集を中心に使用する。9/26のシンポジウムは、後学のためポスター作成と傍聴記を学生に依頼する（傍聴記は、2015年度内をめどに公開予定）。莊氏には、英国のディキンソンの著作が日中でそれぞれ紹介された際、中国側が日本の資料をどこまで参照したのか、日中英の文献の調査と照合を依頼し、あわせて関連発表を9/26に依頼する。

研究成果

8 月 26 日 チュラーロンコーン大学でのタイ国日本研究国際シンポジウムにて、岩井氏、合山氏、橋本がそれぞれ口頭発表を行い、久保田氏、平松氏、メータセート氏と意見交換を行った。

岩井氏は、「タイはいつ微笑んだのかー「黄衣の国」「白象の国」から「微笑みの国」への道程」で、タイ＝「微笑の国」という通称が、英国に由来することを計量分析によって明らかにし、それが日本にも広まっていったことを指摘した。

合山氏は、「内閣文庫本『暹羅国山田興亡記』をめぐってー近世前期における山田長政の形象」で、江戸の『暹羅国山田興亡記』について、内閣文庫本が従来の翻刻とは異なる別系統であることに注目し、その特異性を指摘した。

橋本は、「ポカホンタス伝説としての山田長政物語ー明治の小説から大映の映画までー」で、長政伝説が、ポカホンタス伝説の移入とともに日本版異人種間ロマンスとして再構築されていた可能性を指摘した。

これらの発表は、久保田氏、平松氏、メータセート氏らからの活発な意見交換や示唆を反映させて論文として寄稿し、『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書 2014』に査読を経て論集に掲載された。

8 月 31 日 手塚治虫が映画『王様と私』を流用していることを指摘した橋本の「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用ー「孔雀貝」と「火の鳥」ー」(2014)に関連して、駒沢大学での怪奇怪談研究会にて、「手塚治虫における四谷怪談の変容ー傷の復讐から蛇女房の物語へー」と題して、手塚における「四谷快談」において、お岩の傷と戦災孤児の傷の対照は『紙の砦』における女性の火傷を継承しており、復讐が不可能な戦災の痛みを癒す蛇女房の物語へと転化していることを指摘した。

9 月 26 日 大阪大学での国際シンポジウム「環流の比較文学のためにー日英の還流から多国間の環流へー」にて、河村氏、橋本、久保田氏、鈴木氏、カルディ氏、荘氏が研究発表を行い、岩井氏、合山氏がラウンドテーブルとして 8 月 26 日のシンポジウムについて研究報告を行い、日英タイの三国間の環流現象についてその具体例と今後の可能性を議論した。なお参考までに、学生に依頼して作成したポスターも以下に掲示する。

河村氏は、「貧困」の日・愛蘭比較文学——小林多喜二と Eilis Dillon をめぐって」で、日本とアイルランドに見られる「貧困」をめぐる戦いを比較文学的視点から報告した。日本では小林多喜二の小説『防雪林』(1928)と『不在地主』(1929)を中心に、アイルランドではアイリス・ディロンの小説 *The Across the Bitter Sea*(1973)を取り上げ、両者の舞台がそれぞれ前者は明治期の日本内地に対しての「内殖民地」北海道で、後者は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのイギリスの「内殖民地」アイルランドというように、被支配地としての「内殖民地」に於ける被支配者の貧困が共通のテーマであることを指摘した。

橋本は、「英国外交官の黄禍論小説」にて、駐日英国の外交官アシュトン・ガトキンがジョン・パリスの変名で書いた小説「キモノ」(1921)について、その主題と影響について分析し

た。日本人女性と英国人男性の結婚が幻滅に終わるという内容は、あからさまに日英同盟の更新を前にしたプロパガンダであり、実際、日本政府が米国での転載に憂慮する外交文書を紹介した。

久保田氏は『春の雪』に描かれたシャムの王子と姫たち』にて、タイ（一九三九年に国名をシャムから改名）という歴史的・地政学的な実体が、『春の雪』（「新潮」一九六五・九～六七・一）においてどのようなイメージを通して描かれてきたかということ进行考察した。両国をめぐり歴史と社会が反映されたシャムの王子や姫の描写を通して、日タイの歴史と文化との関係性、その中でもシャム王室と日本の皇室との関係性について論じた。

鈴木氏は、「能「鉄輪」から郡虎彦"Kanawa"へーイギリス女性参政権運動と演劇との関わり」で、郡虎彦の戯曲「鉄輪」が1917年にロンドンで上演された時、彼は「鉄輪」を日本語から英語へと翻訳したことにまず注意を促した。その際、郡は、女性が自己の意志で「望み」を叶えるというテーマを押し出したものへと改作を行っており、それは郡がイギリスへと渡り、イーディス・クレイグやパイオニア・プレイヤーズと関わり合う中で、女性参政権運動へと関心を広げていったことを示していることを指摘した。

カルディ氏は、「三島由紀夫の作品におけるエウリピデスの悲劇」にて、『ニオベ』と『朱雀家の滅亡』に焦点を当て、三島由紀夫の戯曲における古代ギリシアの役割について考察した。両方の作品で三島は、古代ギリシアの神話や悲劇からインスピレーションを受ける一方、戦後日本における政治的な変化、社会的な転換、伝統的な価値観と新しい価値観の差異などに注目し、神話の枠組みを借用することによって、現在と過去の差異を強調し、戦後日本の混沌とした現実に理想的な秩序を再現することを試みていると指摘した。この秩序の再創造からはT・S・エリオットが提起した＜神話的方法＞が連想されることから、三島によるギリシア神話の改作をモダニズム文学の＜神話的方法＞と比較して論じた。

莊氏は、「1940年代の在台日本人の郷土意識—池田敏雄の台湾民話とその周辺—」にて、一九四〇年代の台湾では、日台両方とも〈郷土〉に対する概念の変化が見られることに注意を促した。そこで池田敏雄という在台日本人の台湾民話に着目し、歴史状況の葛藤の現場として池田の活動を捉え、一九四〇年代の日台の文化的交渉の錯綜を具体的に示すものとして、池田とその民話を提示し、池田民話の再評価を試みた。

なお、莊氏に依頼した結果、『東方雑誌』におけるディキンソンの著作紹介は、『太陽』を明らかに参考にしつつも、英文原典にあたって作成されていることが判明し、その成果は、橋本が「ディキンソンの『中国人からの手紙』(1901)とアジアでのその受容」において、言及のうえ、明記した。本論文において橋本は、ディキンソンの著作が中国人によって書かれたとタゴールや岡倉覚三にまで誤解されたことを指摘し、そうしたアジアでの受容とそれに困惑するディキンソンの姿を、最晩年に彼に師事した吉田健一のエッセイから発掘した。

本共同研究の結果、次年度に国際シンポジウムを行い、共同研究の成果を本格的に発表する計画が立ったほか、各分担者の科研などの共同研究申請が行われ、引き続き成果を共有し、発展させていく基盤形成が可能となった。なお、これら上記の成果の一部は、橋本が産経新聞関西版夕刊文化面に一文を寄稿し、広く社会に還元することにも努めた。

環流の比較文学のために
——日華の環流から多国間の環流へ——

—日英の環流から多国間の環流へ—

13.00 関合帳簿

＜第一部＞ 貧困と犯罪をめぐる日英の比較文学

11.10-11.11 西村啓祐（近畿大学名誉教授）

研究発表 [①論文・書籍、②口頭発表、③研究会開催、④その他に分けて記入してください。]

1 論文・書籍

橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン 柳宗悦との出会いと朝鮮半島への旅」『民藝』2015年3月号 52-56

橋本順光「ホイッスラーが切り結んだ日本—橋・花火・禅—」『ジャポニズム研究 34 号別冊』(2015) 29-38

橋本順光「ポカホンタス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで—」『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書 2014』(2015年3月) 157-175

橋本順光「ディキンソンの『中国人からの手紙』(1901)とアジアでのその受容」『待兼山論叢』文学篇 48号(2014)1-17

橋本順光「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用—「孔雀貝」と「火の鳥」—」、『日本研究論集』10号(2014)92-116

合山林太郎「内閣文庫本『暹羅国山田興亡記』をめぐって—近世前期における山田長政の形象—」『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書 2014』(2015年3月) 92-107

岩井茂樹「タイはいつ微笑んだのか—「黄衣の国」「白象の国」から「微笑みの国」への道程—」『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書 2014』(2015年3月) 35-45

莊千慧「一九四〇年代の在台日本人の郷土意識—池田敏雄の台湾民話を例として—」『日本文学』2015年9月号 印刷中

河村民部『エロスとアガペ饗宴(シンポジオン)の比較文学——ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで——』(英宝社、2014)

ルチアナ・カルディ「三島由紀夫の戯曲における古代ギリシアと現代日本：『ニオベ』と『朱雀家の滅亡』」『大阪大学言語文化研究』41巻(2014)163-179

鈴木暁世「郡虎彦「鉄輪」における改作と自己翻訳—女性参政権運動と柔術との関わり—」『日本近代文学』92集(2015)1-16

久保田裕子「三島由紀夫「月」論—雑誌「世界」とビート・ジェネレーション」『三島由紀夫研究』15 (2015) 26-34

2 口頭発表

8月26日 チュラーロンコーン大学 タイ国日本研究国際シンポジウム

橋本順光「ポカホンタス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで—」

合山林太郎「内閣文庫本『暹羅国山田興亡記』をめぐって—近世前期における山田長政の形象」

岩井茂樹「タイはいつ微笑んだのか—「黄衣の国」「白象の国」から「微笑みの国」への道程」

8月31日 駒澤大学 怪奇怪異研究会

橋本順光「手塚治虫における四谷怪談の変容—傷の復讐から蛇女房の物語へ—」

9月26日 大阪大学文学研究科 シンポジウム「環流の比較文学のために—日英の還流から多国間の環流へ—」

河村民部「「貧困」の日・愛蘭文学比較—小林多喜二と Eilis Dillion をめぐって—」

橋本順光「英国外交官の黄禍論小説 ジョン・パリスの『キモノ』(1921)とそのモデル稲・ブ

リンクリー」

久保田裕子「三島由紀夫『春の雪』に描かれたシャムの王子と姫たち」

鈴木暁世「能「鉄輪」から郡虎彦"Kanawa"へーイギリス女性参政権運動と演劇との関わりー」

ルチャーナ・カルディ「三島由紀夫の作品におけるエウリピデスの悲劇」

莊千慧「1940年代の在台日本人の郷土意識ー池田敏雄の台湾民話とその周辺ー」

3 研究会

2014年12月4日 日タイ文化交流史と環流に関する成果発表の共有

2015年3月12日 環流に関する成果発表のとりまとめ

4 その他

橋本順光「異人種間ロマンスとして山田長政」2014年11月27日

橋本順光「フランケンシュタインとアンパンマン」産経新聞関西版 2014年10月30日

橋本順光「マジックツリーハウスとネズビット」産経新聞関西版 2014年8月28日

橋本順光「毒娘伝承と『アナと雪の女王』」産経新聞関西版 2014年7月31日

橋本順光「無人島物の原形『あっぱれ、クライトン』」産経新聞関西版 2014年6月26日